

第5回神奈川支部証言集会での姫田先生講演(2008/8/9 神奈川県民センター)

無知は無恥なり；戦争の記憶を風化させないために

皆さんこんにちわ、昨晩開催された北京オリンピックを皆さんもご覧になつたと思いますが、いかがお感じでしょうか。私は1988年から89年にかけて、1年半くらい北京と天津に住んでいましたで研究を行つきました。そのときの成果が今日の話にもなるのですが、そのときから考えますと今日の北京の有り様は隔世の感があります。いろんな考え方もあるでしょうが、華やかに開幕できたことは良かったですよね。

私は中央大学で卓球部の部長をやっていましたで、スポーツの練習のときもいつも言います。今が平和だからこそみんなが卓球だ、野球だといって楽しむことができるのだよ。女性はおしゃれもグルメも大いに楽しみなさい、と。平和だからこそそれができるのだということを忘れてはいけないよ、といつも言っています。

8月の今頃は、あちらこちらでこのような証言集会などが開催されていますが、スポーツも楽しみながら、また平和の意義を確認するという意味でこのような集会を開催することが大切なことですよね。

私がこれから話しをしますが、安島さんや中帰連の方たちの話した後に私が話すのはじつは話しづらいのです。私の話は「刺身のツマ」のようなもので、実際に体験された方の話の後で若干解説めいたものを話すことはやりづらいのです。私も中国で調べてきたことをいろんなところで書いてきてたりしゃべったりしてきていますが、「正論」という雑誌では「中央大学のうそつき教授」だと言われております。私の書いたものや中国人の証言などは「ウソだ」と言われ続けてきました。

靖国神社の遊愁館の話ですが、靖国神社とは元は何かということを靖国神社を参拝する人はほんとうに知っているのかと思いますよね。ご存じの通り靖国神社は西南戦役で西郷隆盛をやっつけたときに、官軍=政府軍の側の戦死者を慰靈するためにつくったのですね。だから鹿児島の人々が靖国神社へお参りに来るのはおかしいですね。

私自身が悔しい思いをしているのですが、私は敗戦のときに小学校2年生でしたが、私の家は二回焼かれました。一回目は44年の神戸大空襲でした。私がそのとき神戸に居たら野坂昭如の「ホタルの墓」とまったく同じ運命にあったと思います。たまたま縁故で疎開していたために命は助かりましたが、母親がいつも言っていました。

「お前が（その時に）居なくてよかったよ。お前が居たらお父さんがお前を

背負って逃げなければならいわ、私が兄を引っぱってその後に付いて逃げなければならないし、たいへんだった。その時兄がいなくなつてようやく探したが、お前が居たら一家4人全滅していた」と。

ですが、原爆にしても東京大空襲にしたも神戸大空襲にしても、その被害にあって亡くなられた方たちに日本は一銭の保証もしていませんね。なぜ靖国神社だけがそんなにありがたいのですか。これが私が靖国神社に反対する原点です。

ましてや、中国や朝鮮、韓国、台湾の人たちを祀るということは日本人はまったく考えません。そもそもどんなことをやったのかということさえも知らないし、教えない。それが日本の教育の原点なのか。私が大学教授としてアジアの話をしているときに、学生にレポートを書かせると「南京大虐殺ということを初めて知った」とか、「従軍慰安婦について「あれは売春婦でしょう」と、平気でそのようなことを書きます。

じっさいに学校で教えられたり、今も本屋で平積みになっている本はほとんどが「従軍慰安婦は売春婦だった」とか、「南京大虐殺なんていうことは無かった」とウソが書かれたりしています。

私の友人である笠原十九司さんが最近、「南京事件と百人切り」を書きましたし、同じく「南京虐殺論争史」も書いています。是非お読みいただきたい。

なぜ過去の侵略と加害を考え、記憶するのか

そもそも日本人はなぜそんなに忘れたかるのでしょうか。私のレジュメに「無知は無恥なり」と書いておきました。知らないということは恥であるばかりではなく、じつは知らないということは一つの大きな力なのです。政治の力です。知らないということを利用されているのですから、知る、という“知の力”をキチッと蓄えて、広めていくこと、中帰連の精神を受継ぐ私たちの任務は、これだと思います。

知らないということは世界に恥をさらすことですし、知らないということはそれを利用されているのだということをしっかりと自覚していくことが、中帰連を受継いでいく私たちの一番大切な任務だと思います。

私が撫順の奇蹟を受継ぐ会の顧問を引き受けたということは、この“知の力”をしっかりと植えつけていこう、そのための力に少しでも役立てればうれしいということで引き受けました。他にも、私は神奈川では登戸の旧陸軍登戸研究所保存運動もやっています。旧陸軍登戸研究所の建物は現在明治大学の農学部の校内にあります。その明治大学の関係者と川崎市民や県民、川崎市の三者で話し合って保存していくことを進めています。

その中で私が特に注目しているのは登戸研究所の中で偽札を造っていたということについてです。偽札というのは謀略です。そこで作った中国の偽札はなんと4億元です。どのように使ったかというと、日本軍だけではいのです。日本の特務機関やその特務機関が使っていた中国人のギャング組織、これらを使って偽札を広めたのです。

なぜ私がそんなことに関わるかというと、謀略とか偽札とかは頭脳、知恵の出しあいです。それはある意味なソフト戦争、「ソフトウオー」ですね。私が今まで研究してきた三光作戦などは「ハードウオー」ですね。戦争というのはみんながわかっていると思うのですが「ソフトウオー」と「ハードウオー」が組み合わされて遂行されます。だが以外と「ソフトウオー」の方が見落とされます。

じつさいに戦犯裁判などで戦犯に問われた人たちはみんな「ハード」の人たちです。謀略など「ソフト」で戦犯にされた人はあまりいないですね。少なくともA級戦犯の中には大川周平くらいのものですね。そういうことで、私は戦争というものはソフト面とハード面と両方が組合わさっているということをこれからもきっちりと学んでいくべきだと思います。

本日の主題は三光作戦ということですが、三光作戦というのは、皆さんに配った資料の中に「華北における無人区」と「抗日根拠地」が書かれている中国側の作成した地図があります。45年ころの「抗日根拠地」とはこんなに広がっているのだということが一目で判りますね。

三光作戦の現実

また、同じ地域の北支那方面軍の作った地図を「抗日根拠地」と重ねてみると、ほとんど重なりますね。すなわち中国側のいう「解放区」とは日本軍のいう「未治安地区」です。日本軍が「治安地区」といっているところは中国側から見ると「占領地区」ということです。問題の一番広々と広がっている地域が「準治安地区」といって、中国側では「半解放、半占領」地区です。万里の長城の南北の広大な地域がこの地域です。

万里の長城は山海關が最後の場所では無いのです。さらに海岸から海の中までつながっているのです。本当に海から這い上がってくる龍のようにズンズンズンと延びて最後は砂漠の中に消えていくのです。これがなぜ重要かということですが、この万里の長城から北側が満州国ですから、日本軍側からは「治安地区」でなければならぬわけです。

ところがその地域は日本軍と中国軍のせめぎ合いの地域で、日本軍はせいぜい「点と線」しか支配できず、昼は日本軍が支配し、夜は八路軍が支配すると

いうせめぎ合いの地域が広大に広がっているのです。

「三光作戦」のことは中国の文献では「焼殺作戦」とか「焼殺政策」と当時の中国共産党の資料には書かれています。「強姦、焼殺」とも書いてあります。「強姦、焼殺」ということが後に「三光」というのです。なぜ三光作戦の中の「奪い尽くす」ということが問題になったかというと42年以降、徹底的に八路軍をたたきつぶし、勢力を封じ込めようとしたのです。その際にも日本軍は現地調達主義ですから食糧の小麦や綿花や暖房など何も持ていません。私たちと一緒に南京事件の調査を行った本多勝一は「南京は一番寒い」と言っています。なぜそう言ったかというと、12月13日から17日までが中心的な事件のあった日です。あえてその時期に調査が行われました。今は記念館になっている場所へ当時発掘作業が行われていて、その作業小屋で現地の人の話を聞いたのです。だが1時間もすれば足もとからジンジンと底冷えがして、たしかに寒いのです。私はその時初めてわかったのです。なぜ日本軍がメチャクチャに焼き尽くしたのか、ということを。中国人たちの家を焼かなければ暖房がないのですね。ずっと南の南京でさえこんなに寒いのだから、華北へいけばマイナス20度なんてことがしそうあります。私は天津で生活した経験がありますがそこでもマイナス20度近くになりますからね。

そんなところで日本軍は暖房も何もないところで中国軍を追っかけ回しているわけですね。そして万里の長城の付近は「連山山脈」という山また山の地域です。南側は平地ですが北側は山岳地帯です。私も現地へ調査に行きましたが、なんか悲しくなってくるのです。何でこんなところまで日本の兵隊さんがとことことやって来たのだろうかと。そこまで行った兵隊たちの気持を考えると、本当に悲しくなります。本当に何にもないです。

私は88年と95年に行きましたが、95年のときでさえ私たちが行った村に電話が無かったのです。私たちが着いたときは現地に電話連絡が入っていなかったのです。中国ではこのような場合は必ず電話連絡が入るのです。私たちの行動は全て中国当局に伝えてあるのに電話連絡が届いていないので、「税務署が来た」と言わされたのです。日本でも田舎の方へ見慣れない人たちが行くとまず、「お役人」か「警察」とか「税務署」の一言と見られます。

「お前ら、何しに来たのか」という目で見られます。中国側の協力者の人がそういうときは現地の人と酒を飲んで、女の話でもしてうち解けてはじめて本当の話をしてくれるようになるんだと教えてくれました。半分は冗談で、半分は本当のことでした。本当に、万里の長城の中に入つて、「あなた達は日本軍とどのようにたたかいましたか」と私たちが聞いても「お前たちは何しに来たのか」という目で見られますよね。

税務署か役人と見られたのでしょうか。いきなり食つてかかられて、何を怒

られているのかわからないし、びっくりしました。よく聞いてみると私たちはあれだけ八路軍に協力してたたかってはないか、大きな犠牲も払ったではないか、なのになぜこんなに貧しいのか、といっているのです。

同行した中国の研究者である陳平さんは、この人たちは、日本が再び戦争をしないために日本の軍国主義の戦争犯罪を追及したいと言っている。日本軍の犯罪行為を日本の歴史の中のキチッと位置づけたいと言っている。そのために日本から調査に来た人日本の学者たちなのだ、と説明してくれました。その上で「抗日戦争のころの話をしてあげてください」とお願いしてくれました。こういう話が伝わっていなかつたためにすごく怒られたのですね。

信頼が無ければ真実は見えない

信頼がなければ本当のことを言ってくれません。「中国人は嘘つきだ」と言い、その嘘つきを信用する大学教授は、嘘つき教授だと言われている私としては、言いたいことは、証言をしてもらうまでにどれだけたいへんなことかということがわかつてくれていない、と思うのです。

「従軍慰安婦」の体験者の本当の声を聞くまでにどれだけ苦労をするかということについても日本人は何もわかっていないのです。「従軍慰安婦」の問題を国際問題としてキチッと明らかにして 1992 年に初めて国際公聴会を開催しました。その時司会を私がやらせていただいたのですが、今でも忘れられない記憶があります。白人であるオランダ人も「従軍慰安婦」にされたのです。それは日本軍がオランダ領であるインドネシアを占領した際にそこにいたオランダ人女性を強姦して、従軍慰安婦にしたのです。

もちろん恥ずかしいことで、本人にとってはそのような過去のことは言いたくないという気持ちは本当によくわかりますよね。中国の方も韓国の方も自分の暗い、苦しい過去の体験を持っている方もたくさんおられます。

オランダの方があえて告発されたのですが、その方はその後結婚されてお嬢様がおられます。そのお嬢様がお母さんに「恥ずかしいことでしょうが、日本の戦争犯罪の事実を語ってください」とお願いして、ようやくその証言が実現したのです。

その方はクリスチャンです。「私は神の名において日本人の罪は許します」「ですが、日本人の犯した罪の事実は忘れません」と言われました。涙がでてきましたねえ。罪を犯した側の日本人が一生懸命に罪を忘れようとしているのです。だが罪を犯された側は絶対に忘れないのです。中国でも韓国でも同じですね。

近く平頂山事件の証言集会が開催されます。この平頂山事件は、かの三光作

戦のはじまるよりもずっと以前に発生した戦争犯罪ですが、これを一生懸命忘れたがる側と、絶対の忘れない中国人との当然の対立があります。

ただ、私たちはその罪を犯した人の責任を追及しているわけではないのだということはわからないのですね。例えば、平頂山事件のときの大尉だった人の息子さんで田辺敏雄さんという方が事件を否定しまくっています。私は田辺さんのお父さんの責任を追及しているわけではないのです。日本軍がなぜそういうことをやったのか、行われた事実はどうだったのかということだけをキチッと残して、過去の事実を忘れないようにしよう、と言っているのです。それを「私の父はやっていない」と言っていますね。「百人切り事件」も先日裁判がありました。「百人切りを実行した」と当時の新聞に書かれた人の遺族の方が、(どな人がその遺族か)そんなことは私たちも誰も知らないし、何も遺族の方の責任を追及しているわけでもない。なのにわざわざ名乗り出てきたわけです。その神経は私にはわかりません。おそらく「貴方のお父さんの名誉が傷つけられたのだから、裁判に訴えろ」とけしかけた人がいますね。

「百人切り」の当事者たちは「BC級裁判で処刑されているわけですから私はご遺族の気持ちちはわかりますよ。だが、ご遺族個人の責任を追及しているわけではなく、戦争そのものの地獄図をキチッと後世に残しておかなければまた同じ誤りを犯すのではないかと恐れているのです。そのところははわかってもらいたいですよね。

何よりも被害者のお気持ちを第一に考えなくてはいけないと思いますね。日本人は明らかに加害者なのです。戦争を仕掛けて侵略して、三光作戦を行ってきたのですから。その被害者の証言をまったく信じられないということから話が出発すれば、それはもう議論になりませんね。

現在、日中韓の歴史問題に関する政府間レベルの話し合いなども行われています。中国側にも日本側にも私の友人が入っています。やはりその場合も日本側が「被害者の証言を信じない」ということを前提においた場合は、歴史認識問題について絶対に議論ができません。できるわけがありません。

考えてみてください

皆さん、考えてみてください。北朝鮮に拉致された人のことを考えてみてください、北朝鮮側が最初から「(拉致はしていない) そんなことはウソだ」「日本はウソをついている」と言われてきたら日本人の私たちはどう思いますか。それと同じことではないかと思います。

北朝鮮に拉致された方々への同情と支援、これは当然私たちはやります。ですが、日本は過去その何万倍のことをやってきたのだということを考えればあ

の北朝鮮拉致事件に対して日本の世論は同なのでしょうか。国の政策まで変えてしまおうとか、北朝鮮を先に攻撃しろ、という暴論まででてきてているのです。そういう拉致事件被害者に対する同情が過度になって北朝鮮をやっつけろと言うのですね。

昔「暴戾支那を膺懲（ようちょう）せよ」と言ったことがよみがえってきますね。「暴戾北朝鮮を膺懲せよ」と言っていることとそっくりですね。

翻って北朝鮮は拉致されて人たちのことを日本人が真剣に考えるならば、かつてそれをやられた側の朝鮮、韓国人、中国人等々アジアの人たちの気持ちも少しでも理解してあげれば歴史認識問題は一発で解決できることです。私はいつも言います。北朝鮮に拉致された人たちへの同情心の一割でも、いや1パーセントでも日本人に日本の世論が形成されれば中国、韓国などとの現在の歴史認識問題をめぐるぎすぎすした関係は直ぐに無くなります。

だが、まず「相手の言うことはウソだ」と、証言は“白髪三千丈”ウソばかり言っていると、こういう態度を最初に言われたのでは、私の本にも書いてあるのですが、亡くなってしまった人が「私は〇月〇日に〇〇場所で殺されました」と言わなくては事実ではないのかということになりますよね。

このような事実は軍隊が一番多くの資料を持っているわけです。先ほどの偽札の場合も、残った物は全部燃やしています。記録も抹殺されています。なぜ偽札を造ったのかがわかったのか。それは中国でばらまかれたものが現実に残っているし、それを造ったという日本の将校の証言もあります。そういうことからはっきりするのです。

過去を消させない

45年8月15日を境に日本の加害の資料は全部消されてしまってのです。消されようとしたのです。ウソではない。私が外務省の外交資料館へ行ってじつさいに調べました。1937年12月からの従軍慰安婦の資料から1938年3月までの南京に関する資料がごっそりありません。日本の外交官はあれだけ詳細に本国にどんどん情報を探ってくるのです。私は香港総領事館に2年ほどいましたからよくわかります。毎日本国への報告書を書いています。香港で今日は病人が何人発症したかとか、死体がいくつ発見されて香港警察の見解は、などと詳細に全部本省に送っています。

日本の外交官は、キャリアもノンキャリアの人たちもの姿勢や仕事ぶりは一緒にいましたからよくわかります。本当に几帳面です。当然、当時の外交官が南京虐殺のことを書いてないわけがない。その資料が全くないということはおかしいですよね。

南京虐殺否定側の人は「資料が無い」ということを強調します。三光作戦に関して資料が無いと否定側の人は言いますよね。

資料が無いのは誰の責任なのですか、加害の資料を消し去ってしまった人の責任ではないですか。しかもなぜ三光作戦というかというと、有名な岡村寧次支那派遣軍総司令官の「三戒」という言葉があります。「殺すな、焼くな、犯すな」ということです。最初のころ、岡村大将は部下に対して戒めた、とこの言葉を持ちだして得意げに書いてあります。その岡村大将でさえ後では日本軍は中国で乱暴なことも行ったということ、心が痛むということが書いてあります。

本当は中国から見ても三光とは言えないのです。殺し尽くす、焼き尽くす、奪い尽くす、それに「犯し尽くす」が入らなければおかしいです。三光ではなく四光です。それをあえて三光といったのは岡村の「三戒」といったのはウソッパチだということの意味から言っているに違いない、なぜならば中国側は「三戒」ということをちゃんと知っています。それでそのウソを証明するために三光と言ったのですね。

私の感覚から言うと「奪い尽くす」ということの中に、物資を奪い尽くすということだけではない貞操を奪い尽くすというという意味と強制労働という形で労働力を奪い尽くすことともも含まれます。強制労働に関しては日本の資料にも出てきますよ。「満州から何10万人を朝鮮へ移住させた」とか、天津にいまでも日本から返ってきた遺骨が4000体ありますとかです。遺骨だけでも4000体ですから強制労働に連れて行かれたのはもっともついたのでしょうか。

償いの気持ちを

要するに「奪い尽くす」の中に労働力も、女性もみんな入っています。それを中国人は三光作戦と言い、日本人はそれを否定しまくるという構図になっていますが、このような事実をキチッと認め、認罪し、償おうということ。お金だけで償うということではないのです。日本人は「償う」というとすぐに「お金がいくらかかるか」という人がいる。実際問題としてお金で償うことはできません。それはできないとハッキリ言うと問題が起きるかも知れませんので「できないかも知れない」とでも言っておきましょうか。

じっさいに中国側が行っている公式の数字をご存じでしょうか。1995年に当時の江沢民主主席がモスクワで言ったのは「殺された人が3500万人」で、直接間接的な経済的被害は5000億ドルだと言っています。

金額そのものはそんなに大きい額ではないのです。ドイツがユダヤ人たちに対する強制労働等の5000億マルク支払っています。そのお金はベンツやフ

オルクスワーゲンや当時のドイツ軍事企業などがお金を出し合って、政府と折半で出しています。日本は鹿島が花岡事件でホンのちょっぴり認めただけで、強制労働についても他には認めていませんね。政府も認めていません。

1978年の日中平和友好条約で国家賠償は無くなつたといつていますが、こんにち問題になっているのは、個人補償の問題なのです。保証の問題をどこまでなのか、という議論をはじめるとそれもたいへんなことです。だが問題はそもそも日本は心から償う気があるのかどうかということです。中国が日本の国会にあたる人民代表会議でも賠償要求の決議も出されていますが、実際問題として誰それにいくら支払え、とはとうてい言えるはずはありません。できっこありません。ただし日本はそれに対してどう答えるのか、ということです。罪を認め、何らかの形で償います、という気持ちがまず第一です。そういうことですよね。そういう気持ちを形にしなければいけない訳です。またそういう協議に入って行かなくてはならないのですが、しかし日本側が一番まずいことはそれを知らない、ということです。知らないからごまかすことができるのです。

たとえば7月19日の毎日新聞に「バターン死の行進」ということが書かれています。炎天下に100キロの距離をアメリカ軍の捕虜を歩かせた事件があった。少なく見ても7000人のアメリカ軍人が死んでいます。そのこと一つとっても日本人は知らない。そのことに対して日本はどれだけ頭を下げて謝ったか、です。「捕虜だからやむを得なかった」ということは絶対に言えません。

南京大虐殺でも捕虜を数万人殺していますが、「あれは捕虜ではない」と強弁する学者もいますが、そもそも捕虜に対する扱いは日本軍はめちゃくちゃだったのです。捕虜はあって処置してもいいということになりました。捕虜なんて、食わせなくてはならないし、文句ばかり言うし、面倒だから片づけてしまえということです。じつさいに「処置せよ」という司令官の文書もあります。「適時、処置せよ」と命令されたらどうしますか。優遇することにはなりませんよね。だから捕虜は徹底的に虐待されてしまうのです。

事実を知らなければ無視される

南京大虐殺からはじまってバターン死の行進、泰緬鉄道でも多くの捕虜が亡くなっています。そういう事実を日本人は知っているのか。またそれについてキチッとお詫びして保証しようとしたのか。その他にもまだまだあります。昨年7月アメリカの下院では従軍慰安婦問題に対する決議がされました。アメリカだけでなくカナダ、オランダ、EUなど「セクシャル制度に関する議会決議」を上程していることを日本ではほとんど知らないのです。

こういうことを知ってキチッと反省の姿勢を示すということが北朝鮮に対する態度と同じように、よその国の人に対する思いやり、理解、同情があればこんなことは何でもないことなのですが、それが日本はできないのです。

それはまず知らないということが第一で、さらには人情ということもあるでしょうね。三光作戦をやってきたことを中帰連の方々は撫順での裁判において認めてこられています。戦争犯罪の裁判においてキチッと記録に残されています。この事実を否定することはできません。書類でも、フィルムでも残っています。これについては否定派の人たちも文句はつけられない。その場合どうするかというと無視するのです。

人間は変わることができる

私はなぜ中帰連の人たちを支援するかというと、中帰連の人たちのほとんどが、名もなく、貧しく、美しく、多くの人はすでに亡くなっているらしくっています。戦犯裁判に問われたときは、日本の軍隊の中でも組織的にはかなりの地位の高い人たちもいましたよね。その人たちが戦後、日中友好と平和のために献身的になってきたという自体が“奇蹟”です。またそのように人間を変えさせたことも“奇蹟”です。

そのことを日本の守旧派の人は“洗脳”といいます。しかし「翻身」と「洗脳」は違うのです。根本的な違いは人間に対する信頼と愛情です。人間は本当に変わることができるのだという信念と愛情があるのかないのか、それによって相手に対する態度が変わってきます。

私は自分では大したことのない教員だと思っていますが、学生がいなければ大学教授は務まらない訳です。私は唯一大学生に対して持っていたのは、必ず誰にでも一つはいいところがあるのだよ、ということです。私は学生時代合唱団に入っていて「音痴を教育すること」が任務だなんて言っていたのですが、音痴なんて元々誰もいないのです。必ずそれは変わのだという信念でやってきました。

話しが逸れましたが、人間は変わることができるのだという信念と愛情が中国共産党にあったと思うのです。今、中国共産党に悪口を言う人が沢山いますよ。私も文句が言いたいことがいっぱいあります。だが、それはそれとして1945年までに中国共産党はたいへん苦労をしました。ほとんどが殺されかけたところまで追いつめられたりもしました。延安に来た時はわずかに一万人、二万人という人たちですよ。その人たちが、逃げ回って逃げ回って延安にたどり着いたのですね。その人たちが1945年には450万人にまでなっています。

なぜそんなに変わったのかですね。単に政策だけで変わったわけではないでしょう。中国のお百姓さんに対して「あなた方は変われるのだ」と教え、「変えなくてはいけないのだ」という信念がすごく大きな影響を持っていたのだと思います。そして捕虜に対しても「あなた達は変わるのだ」という信念ですね。

これを「方策」だとか、「策謀」だという人もたくさんいます。確かに策謀です。心を変えて味方にするわけですから。敵を味方に変える訳ですから策謀以外になにものでもありません。「あれは中国共産党の策謀だ」ということで、そこで止まってしまうのです。

私はそこから進んで「当たり前だ」と。政策であり、策謀であることは決まっているよ。だがなぜそういう策謀をするのですか。それは人間は必ず変わるという信念があるからその策謀が真実になって戻ってくるのですよ。日本軍があれだけ大虐殺をやった、その根本は何ですか。捕虜が怖いのです。こいつらは自分たちを後から撃つ、と。その恐怖感から捕虜を殺しているのです。私はそう思います。めんどくさいということと怖くておれないということとで殺してしまいます。

ところが中国人は、徹底的に軍国主義教育を受けた日本軍人でも必ず変わるという信念を持って教育してきたのです。しかもそれは1年や2年ではないのです。延安系統の中国軍に捕まって反戦兵士になった人は、どんな人でも3年かかっているのです。それだけの時間がかかるて日本の侵略戦争の本質を知るのです。そこで初めてこれではいけない、と自覚するのです。早い人でも8ヶ月です。これだけの時間をかけて日本軍人を戦争反対の立場に変えていったのです。これが45年までの中国共産党の捕虜政策だったのです。

45年以降は日本人戦犯もシベリアから送られてきて、そこから6年かかって1000人の戦犯を一生懸命教育したのですね。

レジュメに書いておきましたが、「愛と信頼」「仁情」を確認することですね。人間から鬼に完全に変わっていたら変わるはずはない。戦争の中で人間から鬼に変わっていました。その鬼をまた人間に引き戻す。その時に中国共産党の指導の力は確かに大きい。けれど、戦犯の人たちが完全に鬼に変わってしまっていたかというと、それがそうではなかったのです。そこにつけ入る「仁の心」があったのだと思います。「仁」というのは上からの哀れみのことです。孔子が「仁とは哀れみの心である」といっていますが、哀れみの心ということは“強いものが弱いものへの哀れみ”です。そこに愛が、仁情とか哀れみとかがなければ変わりません。実際に変わらなかつた人がいるのですから。私の知っている限りでは一人だけですが、実際に変わらなかつた人がいます。

そこに、中国共産党は日本人の心の中に潜む情とか愛をしっかりとつかむのですね。これがまた中国人の側から見た奇蹟だと思います。日本人の心をしつ

かりとつかむことができたということ、ですね。それに応えて鬼が人間に変わることができたということが第2の奇蹟です。

そして第3の奇蹟というのが我々なのです。「我々だ」なんて自分でいうものも変ですが、この2つの奇蹟を受け継いで人間の変わっていく歴史を理解し、把握し、後世に伝えていくうなんて奇特な若者たちが出てきたということは、私にいわせれば第3の奇蹟だろうと思います。今、大分県の例を見るまでもなく東京都でも川崎市でも教育委員会がどんどん悪くなっています。上のいうことだけをやっていればいいということばかりやつていれば大分県のような例ばかりがいっぱい出でますよ。

そうでしょう。物言えば出世はできない。文句を言えば出世ができないという脅威がある。これでは人間を成長させることができるわけはない。必ず堕落させます。だから我々の力はたいへん弱い。弱いけれども第3の奇蹟を信じよう、といいたいですね。第2の奇蹟の中でもう一つ、中帰連の人たちは本当にびっくりしますね。1962年に一回分裂しているのです。それが86年に再統一しています。なかなかできることです。日中友好協会はいまだに分裂したままでしょう。もう統一する必要はなくなっているのかも知れませんが、中帰連だけが再統一しています。このことは日本の平和運動の歴史の中では奇蹟ですよ。日本では統一戦線ということが一番できないのです。一番きらいなのです。日本で統一戦線が成功した試しがありますか。

小異を捨てて

これが中国人と決定的な違いです。“小異を捨てて大同につく”ということをよく言いますが、みんな小異を主張して大同につかないのです。市民運動では我々は“奇蹟の会”だと私は言いました。小異は捨てなくてはいけない。小異を言いたてたら市民運動は必ず分裂します。だから中帰連の人たちが2つの奇蹟を起こしてきたことに敬意を表します。そしてその精神と実体験、経験を後世に残していくために少しでもお役に立てることができれば、ということで受け継ぐ会の顧問をお引き受けをしました。今後とも微力ではありますががんばっていきます。

どうぞ中帰連の方は長生きを、若い奇蹟を受け継ぐ会は再度教育をやっていこうではありませんか。今日はありがとうございました。

質疑省略